

Ⅶ-234

人は都市河川のどこに着目するのか

建設省土木研究所 正会員 岡部 勉
 建設省土木研究所 正会員 末次 忠司
 建設省土木研究所 正会員 井上 智夫
 建設省土木研究所 正会員 館 健一郎

1. はじめに

日常的な存在としての都市河川の快適性は住民にどのように捉えられているか、快適性の評価に影響を与えている要素は何かを把握することは、今後の都市河川の環境整備を進めていくうえで重要である。河川空間の関係評価については、河川空間の様々な構成要素を用いて、その快適性の説明を試みた例がある(例えば、文献 1)、2))。今回の調査では、住民のイメージと現地で直接川を見た場合の評価の違い、評価に影響を与えている要素(川までの距離や属性)等に注目し検討を行った。

2. 調査概要

調査対象地点は、水質、環境整備水準が異なる東京都内及びその近郊の4地点を選定した。選定された各地点の特徴を表-1に示す。調査では、東京都内及びその近郊の在住者から属性に偏りがないよう43人を選び、平成9年10月に対象地点を直接見てもらいアンケートに答えてもらった(現場調査)。また、各地点において川から100m及び500m付近に在住している人を無作為に選定し、同月郵送によりアンケートに答えてもらった(郵送調査)。アンケートの内容は計60項目で、対象地点の総合的快適性(川沿いの道を歩くのは心地よいかなど)、水質や空間的特性で総合的快適性に影響を与えると考えられる要素の評価などを5段階で答えてもらった。なお、郵送調査は郵送配布、郵送回収で行い有効回答者数は444人(回収率44%)であった。

3. 調査結果の検討

3.1 総合的快適性の主要な因子

図-1は、郵送調査での総合的快適性及び河川空間を形成する主要な要素の評価点(5段階)の、各地点の平均点を示したものである。全ての質問項目でd川の評価が高い。総合的快適性に関する評価の平均点は、良い順にd川、c川、ついでb川とa川が同程度となっている。「水のきれいさ」の評価の順位も、総合的快適性と同様になっている。それに対して、「心地よさ」「水のきれいさ」以外の空間的要素についての評価の順位は総合的快適性の順位とは異なっており「水のきれいさ」が総合的快適性の主要な因子となっていると考えられる。なお今回の調査では水のきれいさとBODとは相関が高く、水のきれいさは水質に相当している。

3.2 総合的快適性を左右する主要な要素

図-2は総合的快適性(この川沿いの道を歩くのは心地よいですか)を評価する際に第一に着目した項目を表している。現場調査、郵送調査に関わらず約4割の被験者が、第一に「水のきれいさ」に着目している

キーワード：都市河川、快適性、水質、川からの距離

連絡先：〒305-0804 茨城県つくば市旭一番地 TEL0298-64-2211(代) FAX0298-64-1168

表-1 4地点の特性データ

	BOD現地調査時 (mg/l)	BOD75% H7 平 度 (mg/l)	川幅(m) 水面幅(m)	護岸形状	河床	流況	備考
a川	10.7	17	34 11.2	緩傾斜護岸 ブロック	泥、ヘド	滞溜	沿川の公園と一体整備
b川	3.75	32	14 5.5	直立矢板	泥、レド	流量小	住宅街
c川	1.83	4.7	8.2 8.2	直立コンクリート	レキ(極小) 平坦	流量小	住宅街
d川	0.77	7.7	20.7 9.2	緩傾斜護岸 コンクリート ブロック	瀬と渚	流量、流速大	河道内に緑多い

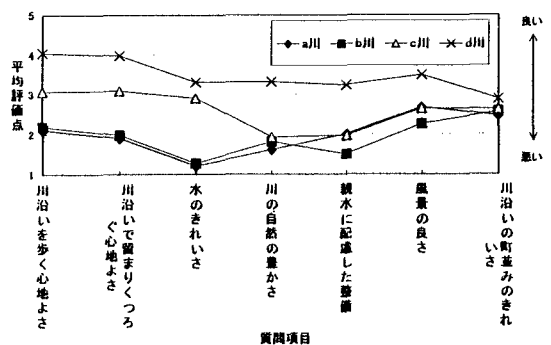


図-1 地点別の平均評価点

事が分かる。したがって、人々の多くが「総合的快適性」を評価する際の判断基準として「水のきれいさ」を見ていることが分かる。郵送調査で第一に「水のきれいさ」に着目した人及び着目しなかった人の「水のきれいさ」の評価点の分布を図-3に示す。図より「水のきれいさ」に着目した人と着目しなかった人の「水のきれいさ」の評価点には有意な差がみられ、「水のきれいさ」に着目した場合には「水のきれいさ」を非常に高く、あるいは非常に低く評価している人が多く、二極化の傾向が見られた。

3.3 住民のイメージ評価と現地での評価の差違

図-4は、質問項目ごとに現場調査、郵送調査（川から100m、500m付近）での評価の平均点を示している。現場調査と郵送調査を比べてみると全質問において現場調査の方が郵送調査より評価が高くなっている。評価点で差が生じた原因は、現場調査は実際に川を見て深く認識した評価の結果であるのに対し、郵送調査は各被験者の調査地点に対するイメージから評価していることによると考えられる。

3.4 川からの距離の影響

郵送調査における川からの距離と評価との関係を図-5でみてみる。図中にプロットされているそれぞれの点は、全質問項目に対応しており、地点毎の100m付近の住民と500m付近の住民との平均点の差を横軸に、4地点全ての平均評価点と各地点の平均評価点の差を縦軸にとっている。図-5より、100m付近の住民と500m付近の住民の評価点の差には、その地点の評価の良さと正の相関があると思われる。つまり、表-1に示したBODとの関係で見ると河川に近い地域に居住している人は水質に代表される快適性要素に敏感であるということが言える。

4. おわりに

水質の善し悪しは総合的快適性の評価に大きな影響を与えていると思われる。また、水質の影響度の大きさは、水質が良い(悪い)ほど大きくなると考えられる。また、住民による河川空間の様々な要素の評価には川からの距離による差がみられた。

5. 参考文献

1)村川、西名；住民意識による都市内河川環境評価，日本建築学会計画系論文報告，第366号，pp42～52，1987。

2)青木；現場実験による水辺快適性の評価，環境情報科学，14-3，pp43～46，1985。

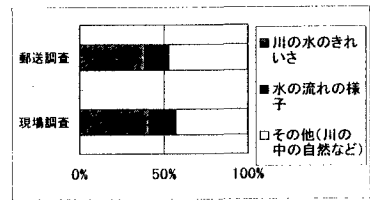


図-2 郵送と現地での着目点

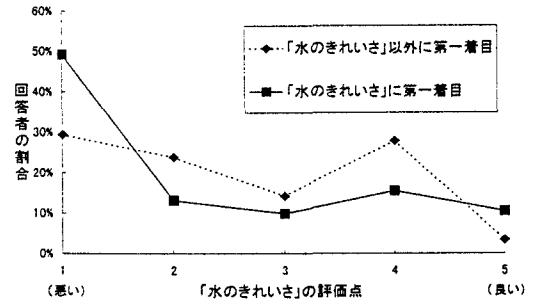


図-3 着目点による評価点の違い

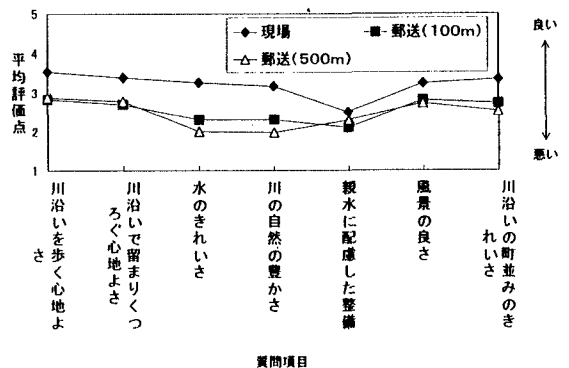


図-4 郵送と現地での平均評価点の違い

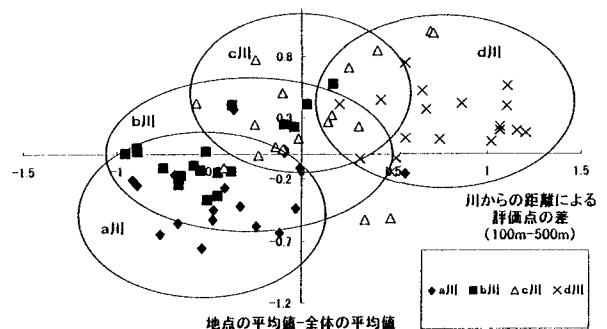


図-5 評価点の高低と距離による評価差